源氏物語 巻三

渋谷一郎訳

中公文庫

潤一郎訳 源氏物語 巻三 改版
中公文庫 ©1991

一九七三年八月一〇日初版発行
一九九一年七月二五日改版印刷
一九九一年八月一〇日改版発行

訳者 谷崎潤一郎

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 大日本印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201834-X
Printed in Japan

江苏工业学院图书馆
藏书章

源氏物語

中務厚
潤一郎訳

巻三

改版

中央公論社

卷三目次

螢　挿画　菊池契月　七
常夏　挿画　菊池契月　三四
篝火　挿画　菊池契月　六三
野分　挿画　菊池契月　七〇
行幸　挿画　徳岡神泉　九五
藤袴　挿画　徳岡神泉　一三二
真木柱　挿画　徳岡神泉　一五三
梅枝　挿画　徳岡神泉　二〇三
藤裏葉　挿画　小倉遊亀　二二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

若菜上　挿画　小倉遊亀　二六一
若菜下　挿画　太田聴雨　三八七
解説　池田彌三郎　五一三

潤一郎訳 源氏物語 巻三

螢（ほたる）

イ、「乙女」で三十二歳の夏に源氏は太政大臣になっている

ロ、六条院の西の対の姫君、玉鬘

今はこのように重々しい地位にいらっしゃいまして、何事にものんびりと、物静かに暮しておいでですから、お世話になっていらっしゃるおん方々も、それぞれ御自分たちの思い通りの境涯に落ち着き、すっかり御身分が定まって、仕合せに過しておいでになります。ただ対の姫君は、お可哀そうにも思いのほかな心配事ができまして、どうしてよいやらと案じわずらっていらっしゃるらしいのです。あのいつぞやの大夫の監の厭らしさとは一緒にすべくもありませんけれども、そんな風なお心がおありになるとは誰も夢にも存じ上げないことですから、ひとりひそかに胸をお痛めになりながら、一種異様な疎ましさを感じていらっしゃるのでした。いろいろなことが分って来られたお年頃のことなので、あれやこれやとお考え集めになっては、母君が亡く

イ、五月は縁を結ぶことを忌んだ月であるという

なっておしまいなされた口惜しさをも、今さらのように悔しく悲しく思うのです。大臣も、お口に出してお打ち明けになりましてからは、かえって悩んでいらっしゃいましたが、人目を憚り給うて、ちょっとしたこともよう仰せにならず、苦しさの餘りには何かと足繁くお渡りになりまして、お前がひっそりと人気のない折には、それと仄めかし給うことがありますので、そのつどはっとなさりながら、そうきっぱりと、間の悪い目にお遇わせ申すわけにも行かず、ただそのようなことは分らぬ風にあしらっておいでになります。御性質が晴れやかで、人なつこくておいでですから、せいぜい取り澄ましたつもりで用心していらっしゃいましても、やはりにこやかに、愛嬌のあるところがお見えになりますので、兵部卿宮などは切々とおたよりをお上げになります。まだ志をお見せになってからそれほどの日数を経たわけでもありませんのに、もう五月雨になったことをお訴えなされて、「今少しお側近くへ伺わせていただけましたら、心にあることの片端なりとも申し上げて、気を晴らすのですが」とおしたためになるのでしたが、大臣は御覧になりまして、「何の、構うものですか。こういうお方たちの御懇望ならさぞ甲斐のあることでしょう。あまりそっけなくなさ

ロ、参議の唐名

いますな」とお諭しになり、「時々御返事をお上げなさい」と、文句を教えて、お書かせになるのですけれども、姫君はひどくお厭なので、気分が悪いと仰せになって、書こうともなさいません。女房たちの中にも、取り分けて身分のいい、里方の有力な者などはあまりいません。ただ母君のおん叔父で、宰相ぐらいの人の娘で、才能なども一通りは備わっていますのが、親に後れて落ちぶれていましたのをお取り立てになりまして、宰相の君と呼んでいらっしゃいましたが、それが手なども相応に書き、いったいに世馴れていますところから、しかるべき折々の御返事などをお言いつけになることがありますので、その者をお召し出しになりまして、言葉などを授けてお書かせになります。

殿にしてみれば、宮がどんな風に言い寄られるか、様子を御覧になりたいのでしょう。当の姫君もまた、あの浅ましい思いをなさってから後は、この宮などが志深げに言ってお寄越しになりますと、少しは眼をとめてお読みになる折もありました。それというのも、どうのこうのと思うのではなくて、歎かわしい大臣のなされ方を、見ぬようにする術もがなと願うところから、さすがに洒落た考えにおなりなされたのでした。宮は、大臣が妙に御自分ひとり力瘤を入れて待ち構えて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イ、妻戸は廂の四方の隅にあり、戸は両開きになっている。「妻戸の間」は、妻戸をあけた戸口のところに当る廂をいう

いらっしゃるのも御存じなく、色よい御返事があった嬉しさに、たいそう忍びやかにしてお渡りになりました。と、妻戸の間におん茵を設けて請じ入れるのですが、御几帳だけを中に隔てて、つい姫君のお側に近い所なのです。非常に心を配って、空薫きものを奥床しいように匂わして、何やかやと世話をお焼きなさいますのが、親でもおありにならないお方の餘計なおせっかいながら、さすがに優しくお見えになります。宰相の君なども姫君のおん答えをお取り次ぎしようともせず、羞かしそうにもじもじしていますのを、「しっかりおし」とお抓りになりますので、いよいよ当人は弱り込んでいます。夕闇の時刻が過ぎて、空がどんよりとおぼつかなさそうに曇っています折から、しめやかにしておいでになる宮のおん有様も、なかなか艶なのです。御簾の内からほのかに匂って来る風の中にも、そうっと隠れておいでになる大臣の御衣の香が添っていますので、たいそう深い薫りが満ちて、かねて考えていらしったよりもみやびやかなおんけはいに、宮は心をおとめになるのでした。お胸の中のことどもを、今こそ打ち出でて仰せつづけられるお言葉の大人しさは、一途にすきずきしゅうはなくて、また格別なところがあります。大臣も感心なさりながら漏れ聞いてお

ロ、几帳の帷は表裏二重になっているので、多分裏の方を一重揚げたのであろう。表の帷はやはりそのまま垂れているので、光が透いて見えるのである

いでになります。

姫君は東面のお部屋に引き籠って、寝んでおしまいになりましたが、大臣は宰相の君が、おん消息を取り次ぎにお側近くいざり入ったのに尾いていらしって、「あまり窮屈なおあつかいではありませんか。何事もほどほどになさるのがいいのです。そう一途に子供っぽくしていらっしゃるお年頃でもありません。この宮などへは、遠くの方から取次ぎを入れてお話しになる、というようなことをすべきではありますまい。たとえお声はお聞かせにならないにしても、せめてもう少し近くへお出になって」などとお諭しになりますので、なおさら当惑しておいでになりますと、やがてそれにかこつけて、御自分がはいってもいらっしゃりかねない御様子なので、どちらにしても面倒と、すべり出て、母屋の際の御几帳の傍らに、横におなりになりました。宮はさまざまにながながと仰せられるのですけれども、おん答えもなさらないで、ためらっていらっしゃいますと、そこへ大臣が寄っていらしって、御几帳の帷を一重お揚げになるのと一緒に、何か光るものを、ぱっとお差し出しになりましたので、紙燭かしらん、とびっくりなさいます。この夕方に、螢をたくさん几帳の薄い帷に包んで、外へ光が

漏れぬように隠しておおきになりましたのを、何げなく帷を繕う風をしてお放しになったのでした。にわかにあたりが際立って光ったので、呆れて、扇をかざしてお隠しになった横顔が、何とも美しいのです。大臣は、こういうようにして夥しい明りがさしたら、宮もお覗きになるであろう、この姫君を全くこちらの娘であると思い込んでいらっしゃればこそ、こんなにも仰せられるのであろうが、人柄やみめかたちなどがこうも備わっていようとは、まさか御存じないであろうに、実際のところをお見せ申して、たいそうな好色漢でいらっしゃる宮を迷わして上げたいものよと、そういう御計画でお工みになったのでした。もし本当に御自分の姫君でいらっしゃったら、かような騒ぎはなさらないでありましょうものを、さりとは疎ましいお心なのでした。

大臣はそうっと別の口から抜け出して、お帰りになりました。宮は姫君のいらっしゃるのを、おおよそあのあたりと推測しておいでになりましたのに、それより少し近いところでけはいがしますので、お胸をときめかせられながら、一通りならぬ結構な羅の、几帳の帷の隙間からお覗きになりますと、一間ばかり隔たった眼の前に、そんな具合に思わぬ光がほのめいていますのを、面白くお感じになります。と、

イ、柱と柱との間隔のことで、「一室」の意ではない

ロ、鳴く声も聞えない虫、すなわ

ち螢の火でさえも、人が消そうとしてもなかなか消えるものではありません。まして私の胸のおもいがどうして消されましょうぞ。「虫の思ひ」の「ひ」を「火」に利かしてある

ハ、声には出さないで終夜ただ身を焦している螢の方が、口に出しておっしゃるお方よりも一層切ない思いを抱いているでございましょう

やがて誰かがどこかへ隠してしまいました。でもそのほのかな光こそは、この艶っぽい出来事の色どりのようにも見做せます。つい今しがた、ぼんやりとではありますけれども、すらりとした背恰好のお方が臥せっていらっしゃったお姿の、ちらと美しく見えましたのが、いつまでもお忘れになれず、案の定おん心に染みついたのでした。

「なく声もきこえぬ虫の思ひだに
　人の消つには消ゆるものかは

お分りになって下さいましたか」と仰せになります。女君はこのようなおん返しに、かれこれ手間をかけるのも変なものですから、ただ即座というのだけを取柄に、

声はせで身をのみこがす螢こそ
　いふよりまさる思ひなるらめ

などと、あっさりと、宰相の君から伝えさせて、おんみずからは引っ込んでおしまいになりましたので、ひどく餘所々々しくお扱いになる情なさを、この上もなくお恨みになります。でもすきずきしいようなので、明け果てるまではいらっしゃらないで、折からの五月雨に軒の雫のしたたるのを聞くのも苦しくて、濡れながら夜深くお出ましにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com